

「平成 27 年結核登録者情報調査集計結果」より

昨年の結核状況に関するまとめ

- ① 新規に登録される患者は減りつつあり、平成 27 年は 18,280 人で、前年より 1335 人減少した。人口 10 万対の罹患率では、14.4 である。
- ② 70 歳以上の患者は、10,765 人で全新規患者の 59%を占める。
(また上記減少の約半分(659 人)は 70 歳以上の高齢者の患者の減少である。)
- ③ 一方、全患者の 28% (5156 人) は 59 歳以下である。
(このうち 1091 人(21%)は、外国生まれである。)
- ④ 外国生まれの結核患者は、増加しつつあり、全年齢では、1164 人で 6.4%であるが、20 歳代では、全患者の 50.1%を占める。その 62%は入国 5 年以内のものである。
- ⑤ 発病から診断までの期間が 3 カ月以上のものの割合は、増加しつつあり、20.4%であり、そのうち、30-59 歳で喀痰塗抹陽性肺結核患者の場合は、35.5%(3 人に一人)で、重症で発見される患者が増えていることを示す。
- ⑥ 結核患者はハイリスク群に集中している。特に 55～59 歳では、無職臨時日雇いが同年代の新規登録の 38.3%を占めており、同年代の男性では、40.8%となる。社会的弱者の結核罹患リスクが高いことが示されている。
- ⑦ 日本の結核対策は、概ね順調に行われ、その成果も上げられつつあるが、世界的な End TB Strategy(世界結核終息戦略)に呼応し、また 2020 年の低蔓延化(罹患率人口 10 万対 10 以下)を達成するためには、さらに現対策の強化、新たな取組みに向けて、努力も必要になってくる。

この発表についての連絡先：

石川 信克 (結核予防会結核研究所)

ishikawa@jata.or.jp

TEL: 042-493-5711